

便所の神様。

arm1475

日本には古来より、八百万の神々の言い伝えがある。

それは万物に神が宿るといふ信仰からなのだが、その割に、宿っている神様にお目に掛かった者などいまい。

だから、俺がその例外になってしまうとは全く予想だにしていなかった。

よりもよって、朝食べた生卵が腐っていたらし、くギリギリで駆け込んだ公衆便所の個室で一息ついてる時に、である。

自称、便座の神様が、俺の膝の上にちょこんと正座している。

その白いツインテール気味なお下げは便座カバーの擬人化のつもりなのか。

「御主は公衆便所南側が設置されて以来、8888人目の利用客である。

非常に縁起の良い数字なので、出雲の下照姫神（しもてらすかみ）に代わり儂が御主の願いを一つだけ叶えてやろうぞ」

わかった、うせろ。……何故、泣く。

「……せ、折角お前を労おうと頑張って顕現したというのにそれはないぞよ……」

「幻覚ではないっ！ 観よ、靈験あらたかなこの力をっ！」

温っ。……これ、ウォシュレット付きか。

「冬場はもう少し温かいお湯が出る。痔持ちの尻を易しく労ってやるのが農の仕事なり。

どうだ、御主の肛門にこびりついた汚穢が綺麗になっていくぞよ、おほほ」

実況すんなボケ。ていうか俺まだ途中なんだが……痛っ。

「腹を壊しているとは難儀な。どれ、農に遠慮せずドンドンぶちまけるが良い。

どんなに尻を汚しても農がたちどころに綺麗にしてやるぞよ、ほれほれ、音も流して誤魔化してやるぞよ」

何故、軍艦マーチ。

「古来より大量に出す為の曲とゆうたら、これが定番ではないか」

アンタはいつの生まれの神様だっつ一つの。

ていうか俺は落ち着いて事をなしたいんだよ！ 願いなんかどうでもイイからとっと失せろ。
……だから何故、泣く。

「以下同文じゃ！ 儂とて神様、無視される事は死にも等しい……このままでは出雲に顔向けが出来ぬ」

知った事か。……ふう、やっとスッキリした。

「出たか、出たのか、だったら尻を拭かせいっ」

——熱っ！ 熱湯じゃねえかっ！？

「ス、スマン、つい興奮して……これでどうじゃ？」

ん……、まあまあの温度だな。ほう、乾燥機能もついているのか。

「最新型じゃ。これだけじゃないぞ、垂れてる時は音楽を流して聞き触りな音を消したり、脱臭機能もバッチリ。無論、抗菌コーティングも施しておる。

便器と一体型のタンクレスで節水にも優れてるし、自動清掃機能もついておる。それでいて省電力型、家計にも安心じゃ」

お前は家電芸人か。

「なんとでも言え。どうじゃ、どうじゃ、気持ち良いじゃろう？」

ま……まあ、ウォシュレットは嫌いじゃないし。とりあえず礼は言う。

「おー、そうかそうか……」

だから何故泣く。

「いや、嬉しかったんじゃ……。」

こういう場所ゆえ、神らしい仕事が滅多に出来ず、焦ってしまったようじゃ、スマン。

無礼をどうかこれで水に流して欲しい」

そう言うと、便座の神様は下水道管の奥へ、俺の排泄物と一緒に流れて行ってしまった。……

ダメダコリヤ（CV 長さん）

「しかし、願いを叶える、って……本当かねえ？」

* * * * *

さあて、困った。

只今残金、ジャスト千円。全財産紙切れ一枚だとは、なんてシュール。

ああ判ってる、A●a z o nで突発的に発生したバーゲンで調子こいて注文しまくっていたせいで。

全部俺のせい。でも前々から欲しかった一眼レフデジカメが安かったんだよおおお。

そして、今日中に家賃を振り込まなければならない。

家主が厳しくて、家賃は1日でも滞納すると即退去させられてしまう。

しかし、手持ちは千円一枚。

バイトの金はあと一週間。

仕送りは更に半月先。超ピンチ。

かと言って、街金のキャッシングには手を出したくない。うっかり手を出して返済地獄に陥り、退学、失踪した奴を知っているからな。

ああ、今こうして出ている小便が全部、金だったらなあ……ヤベエ、ちょっと掛かっ……あ。

この間の、バイト先の便所で遭遇した、便座の神様。

どこの世界に便座に宿る神様がおるか小一時間問い詰めた所だが、今はとにかく糞にもする思いしかない。ああそういや糞と糞って漢字、似てるな。

駄目で元々だ、幸いにも願い事は言ってないから……幻覚だったらどうしよう。

「来たな」

俺の呼びかけに答えて顕現化したら便座カバーの上で大いばりしていた。

まさか来る事が判っていたんだらうか。少し面食らったが、この際細かい事には目を瞑ろう。

「俺を金持ちにしてくれ」

「流石に、それは無理」

「役立たず」

「誰が役立たずやねん。そんな漠然とした願いは答えられないだけだっちゅーの」

まあ、それは予想していた事だ。それにまだ案がある。

「じゃあ」俺は全財産の紙切れを差し出し「これを増やす事は出来るか？」

「可能じゃ」

「なら、このお札の通し番号を全部別々にして増やせる？」

「それは無理じゃ。つーか違法じゃ」

まあ当然だろう。神様といえども偽札作りは御法度らしい。

——お札なら、な。

「じゃあ」

俺は深呼吸し、

「これから先、お釣りを倍にする事は出来るか？」

「お釣り？」

便座の神様はきょとんとなった。

そして暫し傾げて、不思議そうな顔で俺を見た。

「可能だが」

それを聞いた俺は思わずガッツポーズをとる。

「よっしゃあ！ それでひとつ頼む」

俺の計画はこうだ。

お札をそのまま増やされても、通し番号が同じだと色々面倒になるが、硬貨には番号はない。硬貨を増やせばいいのだ。

しかし両替した1000円札を増やされても、こんな便所で大量の硬貨を手に入れば持て余すだけである。

なら、お金がある時にだけ、お金が自動的に増えればいい。

1000円札で100円の物を買って、900円のお釣りを貰った時、神様の力でお釣りが倍になるのだから、1800円。900円が自動的に儲かるのだ。

万札で買った時に困るかも知れないが、ダブってる奴を処分すればいい。何、絶対マイナスにならないんだから構わないさ。

「九百円のお釣りです」

(・3・) あるえー？ 何で増えてないの？

畜生、……あ痛……、こんな時に腹痛かよっ！

えーと、公衆便所、公衆便所は……あった！

「……え」

俺に再び呼ばれた便座の神様は、俺を見るなり険しい顔をした。

俺は構わず言った。

「さっきの願い、取り消せ」

「釣りが倍になる願いか？ うーん、一度聞き入れてしまったからなあ」

「いいから取り消せ！ とっとなり取り消せっ、こんな願っ！……お願いだから取り消してえ……ぐすっ」

俺は便所の中で大声で泣いた。

俺を見る便座の神様のその目は憐憫に満ちていた。そりゃそうだ、お釣りはお釣りでも、

「……臭い」

うっさい、黙れっ。

完